

脇役

子母澤寬

後 胎

寬 澤 母 子

中央公論社

脇 役

著 者 子母澤 寛

昭和37年3月10日印刷

昭和37年3月15日発行

発行者 宮本信太郎

印 刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2ノ1

電話 (561) 5921〜9 番

振替・東京34番

定価 320 円

©検印廃止

目次

脇役

三

厚田日記

三五

名月記

八

丁斎塾始末

一〇九

士官羽織

一四五

流れ木

一七五

裝
幀

中
尾

進

脇 役

只今は荒川区南千住町と申しますけれども、昔はただ三ノ輪とだけで通用しましたあすこの百観音門通寺。本堂の左に上野彰義隊を葬つてある。その中に交つて自然石に「合同船」と刻んだ碑がございます。それに名をつらねた山田八郎、西村賢八郎、松本義芳、前野利正、大塚嘉久治、羽山寛一、小林一知、百井求之助。この八人はみな彰義隊一方の旗頭でありまして、あの時は実に烈しく戦つた。刀疵鉄砲疵の無い者は一人もいなかったのでございます。しかし世の中が變るともうその時の勢にうまくのつて荒波を漕ぎ渡つて行くなどという芸当はとても出来ない。だんだん年もとつて来る、どうせおれ達は敗け犬だ。この果敢ない敗け同士が船に乗り合せて雨風に打たれながらも、しっかりと手をとつて助け合つて行きましようという、互の心の誓を、石にしるしたのが、これでございます。

この中で、大塚嘉久治。元の名を霍之丞。今日はこの人のおはなしをさせていただきますましよう。

彰義隊が総崩れになって、頭並天野八郎が白呉細服地に雲竜を描いた陣羽織さえはつきり見えない程の泥まみれで、道灌山から音羽の護国寺へたどりついたのは、もう夏の日の黄昏であった。雨はやんで、か弱い音の虫が鳴いていたという。

門前でばったり五人づれで来た大塚霍之丞に出逢った。姿恰好で八郎はすぐわかったが、顔は一面の泥だ。

「大塚さん」

天野が駆け寄って、べとべとの手で相手を抱くようにした。

「おお、天野さん、御無事でしたか」

「はっはっ。まだ死なん、まだ死なん」

「お互に」

二人はからだをゆすって笑った。笑ったが泣いていた。大塚は頭取並でもあり第二白隊の隊長だ。すぐ日が暮れたが、どんよりした雨空の底に月が出ている。

その月の明るさで、天野と大塚は、境内を流れる小川を見つけて、そこではじめて手足や顔を洗った。護国寺の事はかねて打合せがあったので、三人五人、或は二十人も一かたまりになって落ちて来る。

寺から塩の握飯が出た。沢庵に酒が出た。燭をかがけて、疵手当をさせながら、数えたら、二百名

の余に及んだ。

酒が廻ると定つたように景気のいい再挙説が出たが、結局は一先ず解散の説に定つて、やがて思い思いに寺を出て行つた。組頭丸毛靱負に従つた七十余名は、握飯や草鞋の仕度も充分にして甲州へ向つたが、晩近く青山久保町の梅窓院までたどりついて小休憩をした時に、丸毛がふと気がついたら、いつの間にかもう四十人が消えて終つて、残るもの既に三十にも満たない。

丸毛は地団駄ふんで号泣した。が、もうどうにもならない。殊には赤坂御門には官兵が充分に鉄砲を揃え、しかも数百に余つて迎撃の備えをしているとわかつたので、遂に止むなく、一人一人、然るべきところに姿を隠すということになった。

この丸毛の相談役として同じに甲州へ向おうとした中に、大塚霍之丞も居りました。

とにかくこれは慶応四年五月十五日の事でございますから、それから凡そ二箇月。即ち七月十三日に、霍之丞は、本所石原町鉄砲屋の炭屋文次郎の奥の座敷で、天野八郎と、ただ二人、早目の昼の膳について居りました。

すぐ地続きが東江寺で、ここに多田の薬師堂というのがございます。特に大きな建物でもなく、どうこうという程もございませんが、恵心僧都の作で多田満仲の持仏であつたという薬師如来の像が安置してあつて、今もなかなか信心者の多いところでございます。

庭の四つ目垣には朝顔の蔓がからんでいる。風鈴が軒に下って、これがちりんちりん鳴っている。もう夏の暑い最中で市中ではなかなか凌ぎ難いのでございますが、薬師につづいて、樹や草の多い大名の広い下屋敷があり、すぐ鼻先きが隅田川ですから、時々思いがけない涼しい風が流れ込んで来たり致して、酒の好きな天野は、単衣のふところを開いて、団扇をつかい乍ら、盃を霍之丞にさして飲んでゐる。さかなは冷豆腐だったと申し伝えます。

二

天野はあれから直ぐここへ隠れた。同志へはそれぞれ巧みに連絡はとったが、いつ自分が敵の襲撃を受けるかも知れない。

そうなると、僅かな恩を深く着て自分をかくまってくれている文次郎が、どのように迷惑するであろう。そんな場合でも、誰にも迷惑のからぬような、然るべき隠家へ移りたいと心掛けて、それとなく探していたら、いい塩梅に、四谷鮫ヶ橋に手頃な一戸が見つかった。

今、食事を済ませたら、霍之丞共々、隅田川端から舟で出ようとすっかりその仕度をしていた。

「残念だが、世の中は一刻一刻目に見えて変って来るね、大塚さん」

「これも八万騎などと誇号する徳川家旗本が腰抜けだからですよ、まことにお恥かしい」

「いやあ、もう誰がいい、誰が悪いというようなものではないだろう、時の流れ、天の勢、どうする

こともならない。わたしは、やっとそんな気がして来た」

「そんな事はない」

「そうだろうか。わたしは、上州の田舎へでも引込んで百姓でもやろうかなんぞと考えているよ」
「はっはっ。方一里に足らぬ小天地で、新式の銃器を腐る程持つて八方に迫った官兵を相手に、詰るところ迄はやった彰義隊の頭目が、腹にもないそんな自棄糞をいっちゃあ困りますな」

「はっはっ。そうだろうか。それは然様として、あんたは、唄や三味線が大層上手ときいたが、わたしもこの田舎氣質が少しでも抜けるように、あんたに手ほどきして貰いたいね」

本気とも冗談ともつかず、天野がずんぐりした太い猪首を叩いて、そんな事をいった時であった。
蜂須賀二十五万石の筆頭家老稲田九郎兵衛の家来六十余名が、銃を構えて窺かに文次郎の家を取り囲んでおいて、撰りすぐった六名がときの声をあげ屋内へ雪崩れ込んで来た。稲田は一万石を領したので、別に稲田藩ともよんで、当時、市中取締に任じていた。

天野はかねて敏捷猿のようだ。あっと思う間に、裏二階へのがれた。うしろから捕手は鉄砲を乱射した。焰硝が眼を開けない程屋内へ立ちこめた。

天野は二階から更に屋根へ出た。裏つづきに物置がある。それへ逃げて、ここから隣り屋敷へ飛び降りれば、森もあり、池もあり、何んとかなる。かねてから考えていたところだ。

が、天野がちらっと屋根へ姿を見せると同時に、下の伏兵が一斉に撃ち放した。

一発が額をかすった。天野は眼がくらんだ。
 残念ながらそのまま肥ったからだが大きな種のように屋根から転がり落ちるのへ、稲田兵が折り重なって飛びついた。

武士の情も何もなく、まことにひどい話ですが、人事不省の天野を、荒縄でがんじがらめにして、このまま牢舎へ送りまして、天野はこれから牢で五箇月をすごしましたが、病気にかかり十一月五日——北にのみ稻妻ありて月暗し——と辞世を残して歿しました。三十八歳でございます。

この騒ぎの中に、一緒にいた霍之丞はどうしたかと申しますと、何しろ江戸っ子で、それに天野に勝る程すばしい人ですから、あの時に裏二階までは天野と一緒にしたが、捕手が天野に氣をとられている隙を見て、早いところ、ぱつと横手へ飛び降りて、そのまま生垣を潜って、薬師の境内へ入ると、目ばたきの隙もなく薬師堂の縁の下へ隠れて終ったものです。何しろ大勢の官兵の目の前で、これだけの事をやるのですから大したものでございます。官兵もこれを見たからそれっというので堂の下へ、どんどん鉄砲を打ち込みました。ところがどういう事をやっていたものか、霍之丞は出て来ないし、ちっとも手答えがないのでございます。入るのを確かに見たのですから、ここにいるに相違ない。この上は仕方がない、お堂を焼き払うということになってその準備をはじめると、何しろ由緒のある薬師でござんしょう。お住職だの、土地の信心の者

などが、そろそろ出て来て土下座をして、どうぞそれだけは御容赦下さいますようにといつて手を合わせて拝むのです。

官兵にも心きいた人はある。こういう事をして、江戸の人間に、自分達をひどい奴だ、情も何もない忌やな奴だと思わせたりしては、後々これを治めて行くのに何かと都合であろうと言ひ出す人があつて、それも尤もだ、とにかく焼払いだけは止そうと話が定り、その代り、兵士を五六名張番させて、ちよいと頭でも出したら射つて終えといふことで、とにかく一旦は引きあげました。霍之丞は、それから丸二昼夜といふもの、食わず飲まず、息を殺して隠れつづけたのでございます。後の話ですが、霍之丞は、食べないのはまだいいが、水がほしくて軀中が燃え出すようになったといつていたそうでございます。番兵は根くらべに敗けたようなもので、あんなに鉄砲を打ち込み、二日もしてまだ出て来ないといふのは、あのどさくさに紛れて、何処かへ逃げて終つたのだらうといふことで、番兵は遂に引き揚げて終いました。それでも霍之丞は、また半日じつとしていて、やつとのことで縁の下から這ひ出した。もうふらふらで、そちこち痛くて立つこともできなかつたそうでございます。

その姿を見ると、すぐお住職が飛んで来て、実にどうも心配を致しました、よく御無事でいられました、それにしてもお腹のすいたことでありましようといつて、寺の書院へつれて行つて、味噌汁をたいて御飯を御馳走してくれました。何しろ彰義隊は、吉原で情夫に持つなら彰義隊とい

う唄が流行^は行^きっていた程で、江戸っ子には大層好かれております。

腹^{はら}拵^じえが済んだから、霍之丞はよく礼をいって、これから白地の単衣一枚で丸腰で気の利いた船頭をたのんで舟で隅田川を上って今戸へ渡りました。ここに角中^{かどなか}というしゃれた船宿がある。このおかみさんというのが前々から霍之丞とは極く懇意^{こんい}な仲でございます。多田薬師の騒ぎはとつくに知っている。こういう時には、その人が自分の知っている人ではないだろうかと思うのが人情で、おかみさんも、内心、心配しているところへひょっこり顔を見せたから、

「まあ霍^{かく}さん」

という訳で、次の言葉もつづかない。

「何しろ危ねえんだ。おかみ、先ずこの頭を野郎^{やろう}にして呉れろ」

髻^{びん}が狭く月代^{きかけ}がずうーっと横へ広がって脳天が丸く出ていて、侍とは違って極く下司^{げす}な恰好でございます。こうすると一寸武士^{ちよつと}には見えないのでございます。

霍之丞はそれ迄は流行の総髪にしておりました。

三

屋敷が小石川の新町にある。

日の暮れるのを待って、角中^{かどなか}のおかみさんと二人、いい仲でもあるように、わざと人目につくよ

うに、肩を寄せ合ったり、頬を突き合ったりしながら、小石川に向っていたが、諏訪町の桑名屋橋の手前で、鉄砲の筒先をこちらへ向けた官兵にぶつかった。

おかみさんがびっくりして、地べたへ坐ったのを見て、霍之丞も、これを真似て坐り込み、無言で手を合わせた。相手はお上り^{のぼ}さんの兵隊だから大丈夫なんだが、うっかり物をいって江戸武士と観破されては大変だと思ったからだ。が相手は笠にかかって脅^{おど}し上げる。が、霍之丞は一切無言で、ただ地べたへ頭をすりつけているばかりであった。

おかみさんはどうとう、

「この人は啞^{おど}なのでございます。御勘弁下さいまし」

といつてうまい泣声で嘆願する。

とうとうばれずに危機を脱した。

やっと屋敷へたどりついて、なお用心深く裏門へまわり、そっところから入って行った。

下郎が二人いるきりだ。

角中のおかみもその晩は泊って、次の朝帰ったが、一日中を置いて、途中迄は駕^{かど}、それからまた忍んで霍之丞のところへやって来た。

「よく来たな」

「よく来たじゃあござんせんよ、旦那、いやもう多田の薬師の一件が江戸市中大そうな評判で、家の

若い者も方々できいて来ましたが、御旗本というは大したものだ、天野さんは残念ながら屋根から転がり落ちてつかまったが、一緒にいたい男の御旗本は、ずばずばずば斬っ払って、あんな大勢な官兵もどうすることも出来なかった、寄ると斬られ寄ると斬られ、血だらけな死骸が山になった、偉いものだ、あれこそ江戸っ子の守り本尊だなんぞというんです」

「へへーえ」

「それがねえ、旦那、いつの間にか、あれは御舎弟の波次郎様が神田の裏猿楽町で剣術の道場を開いていらっしゃる小石川の大塚様という御旗本だ、などということまでが知れ渡っている様子なのでございます。もうこうしてはお危のうございますよ」

「それではおれも滅法な看板になったが、お前が言う通り少し危ねえな」

「少しどころではござんせんよ」

「どうせ上野で命拾いをして来たんだ。惜しくもねえが、敗け犬が敗けっぱなしじゃあ、やっぱり心残りだ。最後にもう一と咬み咬みついてから死にてえよ」

「御尤もですよ」

「知つての通りおれは唄や三味線が好きだから、一と頃、道楽に芝居の下座でごろごろしていたことがある。この野郎頭で、あの大道具裏でまごまごしている分にはあ、ちよいと気のつく奴もいねえだろう。どうだ一つ角次郎さんに頼んでくれろ」

「それはよろしいお考えつきでございますねえ。早速宿六に当らせましょう」

角中の亭主角次郎は、船頭上りでもあることか、山谷堀の八百善の、庖丁一つで何処へでも通用する歴とした板前がぐれて、今ではいい顔の親分だ。

そこで霍之丞はうまく市村座の下座に潜り込んで、内々、市中に潜んでいる上野崩れの人達と通じ合つて居りました。

この時の芝居の座頭は河原崎権十郎。一番目が「里見八犬伝」、中幕に「大晏寺堤」、二番目が「伊勢音頭」で、大晏寺では女形の沢村田之助が春藤次郎右衛門をやつて大変な好評だが、何しろまだ彰義隊のほとぼりがあるし、下総その他そちこちで戦もある。物価も高くなるので、芝居は何処も不景気でございましたが、権十郎はなかなか俠気の男だから、角中親方に頼まれてもいるし、蔭になり日向になりえらく霍之丞をかばつてくれました。

それにしても困るのは、薬師の評判だ。

取り囲んだ稲田藩兵もいつの間にか七八百人ということになり、これを斬つ払った人の働きもだんだん鬼神のようになって、先ず斯う斬つて、その次に、こう斬り込んで来たのを引きはずして逆斬りに払つたと、見て来たように吹聴する者などがあつて、小石川の御旗本は、江戸っ子が寄ると触ると